

——私はこれまでの12年間、「絵のなか/絵のそと」という展覧会タイトルを掲げた会場制作を軸として、「絵のなか」を触ろうとして挫折し、「絵のそと」である物質に墜落する軌跡を風景とし、インсталレーションの形をとって提示してきた。

その折々の景色には、いつも描線があった。その描線は、どこに向かって描かれていたのか。それは、ひとつつながる共通言語としては成り立ち得ない「ことばのドローイング」だ。描きながら、私はいつも、ずっとしゃべっている。自分の外部である捉えられない誰かや社会に向かってしゃべり始めた手は、すぐに絵の具や紙の物質をごつごつと感じ始める。コンテを消す手で擦りあわせた紙は毛羽立ち、絵に寄りそうものの、がっちり組んだ纖維の隙間に私のゆびは入れない。水彩絵の具を使ってみれば、絵は、私が溶いて塗った色は通過させるが顔料と私は紙の上に置いていく。その物質の粒子を浴びながら、自分の手のひらで絵になるためにすり減っていくオイルパステルの誠実さに後ろめたさゼロで向きあえて、しゃべりだせた  そうした稀な一瞬、私のことばは 入れない絵のなかに響いたような感触が少しだけ、もてるのだ。

私が放ち続けた12年分のことばのドローイングの紙々。それは届かぬラブレターの蓄積であったとはいえないか。そしてそこには、絵の具の物質感を貫通できたときに 絵のなかへ開いた、12年分その時々の風穴がある。私はその風穴を、もう一度この場に新しく開きなおし、その成り立ちを よく確かめたい。そして、これから私のために必要な建築法を習得したい。それはきっと、今はもう描けない描線「届かぬラブレター」を包み込みながら、自らの描線が組みあげて行く  ちいさな歴史の階段を打ち碎き続けることだ。それがきっと、からの私に必要な 私の絵の建築法だ。

[佐藤万絵子 2014年8月]